『元朝秘史』第268節におけるイェスイ妃に関する叙述
－グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈*－

藤井　真湖

本稿はモンゴルの『古事記』ともいうべき古典『元朝秘史』巻12第268節の叙述－チンギス・カンの死に言及されている節として注目すべき節でもある－を検討するものである。この死に関しては明確な原因も日時も示されていないという意味で謎の箇所となっている。当該節は、チンギスの死後、西夏の領民の多くがチンギスの后イェスイに与えられたという叙述で閉じられている。本稿は『秘史』におけるイェスイ妃に関する叙述をチンギスに危害を加えて黄河に入水自殺を遂げた西夏の最後の王妃グルベルジン・ゴア妃の伝承と平行かつ交叉させて考察することにより、『秘史』第268節の叙述スタンスに隠されたアンチ・チンギス志向を読み取るものである。

1．本論の目的及び議論の流れ

本論の目的は、『元朝秘史』（以下、秘史）の巻12第268節の叙述のスタンスに隠されたアンチ・チンギス志向を、最後の遠征に同行したイェスイ妃についての秘史の叙述と、民間や年代記に伝わるグルベルジン・ゴア妃の伝承の考察を平行かつ交叉させておこなうことを通して論じることである。この目的を達成するため、本論では以下のように議論を進めることにしたい。本論は、1．を含む6つの節で構成されている。

起となる2．においては、秘史においてイェスイ妃に言及される叙述箇所をすべて抜粋し、その叙述の流れを整理することを通して、秘史が一貫した論理でイェスイ妃についての記述をおこなっていることを確認する。とくにここでは、イェスイ妃が前夫を殺された夫人であるため、次の夫であるチンギスの死に関しても言及しうる資格があることを指摘する。続く承の3．では、夫を殺された後にチンギスの妻となる点でイェスイ妃と境遇的に似通っている西夏の王妃グルベルジンが黄河に入水自殺をはかる伝承のひとつを紹介し、その伝承が見かけの意味とは全く異なる意味をもつ可能性を指摘する。ここでは隠された意味がアンチ・チンギス的なものであることを指摘する。

次の転の部分となる4．においては、グルベルジン・ゴア妃の伝承が17世紀以降に著述された各種の年代記に記載されていることに言及し、その中から『蒙古源流』と著者不明の『アルタン・トプチ』の当該伝承箇所を抜粋し、年代記における当該伝承箇所には、3．の民間伝承と対比させると、民間伝承ほど鮮明にアンチ・チンギス志向が認められないことを指摘する。

これらの考察の追加として5．では、3．で紹介した以外の民間伝承と4．で紹介した以外の年代記を加えて、年代記の特徴、民間の伝承の特徴、さらに両者に共通する特徴を考察する。この考察の中で、グルベルジン・ゴア妃の伝承の多様性が確認されると同時に、民間の伝承であるか年代記かを問わず、この伝承に共通するモチーフは、グルベルジン・ゴア妃が黄河に入

水自殺することであり、また多くの場合、自殺の前にチンギス・カンへの性的危害がなされているという事実を指摘する。

最後の結となる６．においては、グルベルジン・ゴア妃の伝承を語り継ぐ人物として論理的かつ道義的にイェスイ妃が最も相応しいのではないかという仮説を提起する。そしてこの観点から、伝承の担い手としてのイェスイ妃の可能性、さらにはイェスイ妃その人が伝承の作者である可能性にも言及する。この可能性から見た場合、秘史の第268節におけるチンギス逝去の叙述の唐突さと簡略さは、明示的にはチンギスへの配慮であると読めるが、非明示的にはアンチ・チンギス志向を担保するためであったのではないかという見方を提示する。

２．『元朝秘史』におけるイェスイ后の叙述

チンギス・カン（以下、チンギス）には正妻をはじめ多くの后がいたとされるが、『元朝秘史』において登場するのは、そのうち５人である。それらは、①ボルテ・ウジン（ホンギラト族出身）、②クラン后（メルキト族出身）、③イェスイ后（タタル族出身）、④イェスゲン后（タタル族出身）、そして⑤グルベス后（ナイマン族出身）である。①のボルテ・ウジンは正妻であり、他の后たちとは別格の存在となっている。チンギスと正妻との間にはジョチ、チャガタイ、オゴタイ、トゥルイの４子があり、第三子のオゴタイがチンギス・カンの後継者となり、イェケ・モンゴル・ウルス（モンゴル帝国）を引き継いだことはよく知られている。

①のボルテ・ウジン以外の后たちはいずれもチンギスが征服した部族から娶った后たちすなわち“戦争捕虜”である。本論で着目するのは、その“戦争捕虜”である③のタタル族出身のイェスイ后である。秘史においてイェスイ后という語は変化形も含めて 11 箇所に現われている[1]。そのうち、最初の３箇所は、巻５第155節において集中して現われている。この節では、まず、征伐したタタル族のうちイェケ・チェレンの娘イェスンゲンをチンギスが娶ったことが記されている（前述の④）。イェスンゲンはチンギスに自分よりも姉の方が美しいので姉を娶るように進言する。これに対してチンギスはもし姉が来たら自分の地位を譲るかと尋ねる。イェスンゲンは譲ると言う。チンギスはこれを聞いて、戦で行方知れずになった姉のイェスイを探させ連れてこさせる。イェスンゲンは自分の言った前言に違えることなく姉に席を譲る。だが最終的にはチンギスはこの姉妹二人とも娶っている。イェスイにはチンギスに嫁す以前に夫がいたことにも秘史は触れており、その夫はチンギス軍の追っ手から逃れ去ったとある。このように、前述のチンギスの后たちの③のイェスイと④のイェスンゲンは滅ぼされたタタルの姉妹である。

イェスイの名前に言及される次の３箇所は、前述の節のすぐ後の巻５第156節に集中している。ここでは、イェスイの夫がチンギスに抹殺される顛末が書かれている。チンギスはイェスゲンとイェスイのタタル姉妹を娶った後日、宴会においてイェスイがため息をついているのを見て怪しみ、その宴会にいた男性たちを部族（アイマク）ごとに分かれて立つように命じる。このとき一人の男性がどこの部族にも属さずに孤立しているのをチンギスが問いただしたところ、この人物はイェス妃の前夫であったことが判明する。この人物の出身は秘史では不明であるが、自らがイェケ・チェレンの娘であるイェスイの婿であるという身分を明かし、戦乱も鎮まったので一旦は逃げたが大勢の中では目立たないと思いチンギス陣営に紛れ込んだと告白している。これ

に対して、チンギスは反乱を起こそうと思って戻ってきたに違いないとして、この人物を直ちに斬らせている。

この節以降でイェスイ妃が出現する5箇所は、巻5からかなり隔たった巻11の第254節以降になる。秘史が12巻計282節から構成されていることを考えれば、秘史のかなり後半部分に登場していることになる。巻11第254節には2箇所イェスイの名前が見えている。ここでは、チンギスが使者を殺害されたことを根に持ちサルトールの民を征伐するために出発しようとするさいにイェスイ妃が建議する。その内容は、生を受けた者に永遠ということはないのでチンギスの死後、チンギスの正妻から生まれた4子のうち誰を後継者にするかを決めておいた方がよいというものである。これに対して、チンギスは、イェスイは女性でありながら尤もなことを言ったと褒め、そのまま後継者問題に話が進んでいる。

最後の3箇所は、いずれも最終の巻である巻12に現われている。その第265節に2箇所、最後の1箇所は第268節に含まれている。この2つの節はチンギスの西夏（タングート）征伐に関係する内容に関わっている。重要なのは、イェスイ妃の登場する最後の1箇所はチンギスの死の叙述の直後に出現していることである。2つの節のうち最初の第265節においては、チンギスが西夏征伐に向かうときに后のうちからイェスイ妃を連れて行ったこと、そして西夏征伐のさなかの巻狩のさいにチンギスが落馬して発熱したことが語られている[2]。第268節ではイェスイ妃の名前が出現するが、ここでは西夏征伐の後、同じ年の亥の年にチンギスが逝去したことが唐突に述べられた直後に[3]、西夏の民から多くの者がイェスイ妃に与えられたことが叙述されたところで節が閉じられている[4]。

以上、イェスイ妃の出現する箇所と内容を秘史の節順に述べたが、その出現の偏在性を考慮すると、おおよそ二つの場面にイェスイ妃は関わっているということができる。前半は、チンギスがイェスイを娶りその夫を殺害するという内容、後半は、チンギスが最後の遠征である西夏征伐のさいにイェスイを連れて行き、西夏征伐のあとチンギスが亡くなり、その西夏の民の多くがイェスイに分け与えられたとする内容である。

注意深くみれば、この二つの内容は、後継者を決めるようにと進言するイェスイ妃の登場する巻11第254節によって結び合わされているとみてよい。なぜならば、巻11第254節によって前半と後半が一連の流れとして読解できるようになるからである。つまり、イェスイ妃が後継者問題に口を出している箇所は、イェスイが前夫とチンギスという二人の夫の死を迎える間に位置していることになる。チンギスの死という事態はそのまま後継者問題を惹起するので、イェスイの後継者問題への言及は前半と後半を結ぶ重要な結節点となっているといえる。しかも、イェスイ妃の出現する一連の叙述の整理で明らかになってくるのは、イェスイが後継者問題に立ち入る権利はどこからくるかに関して、イェスイは前夫を殺害されているからこそ、第二の夫すなわちチンギスを殺害されることに言及できるという論理である[5]。

実際、このような立場にいる后は5人の后でイェスイ以外ひとりもいない。それゆえ、政治の場面でタブー視されたであろうチンギスの後継者問題に口を挟むことのできたのが唯一イェスイ妃だということになる。だが、チンギスは、この重大な事実を意識的か無意識的かは不明であるが、「女性なのによく言った」と発言しており真正面から向き合っていないといえる。

ところで、本論で、イェスイ妃に注目することは、個人を越えて、イェスイ妃の出身のタタ

ル集団に注目することでもあるが、筆者は既に本誌第４号において秘史におけるタタル集団の影を指摘している[6]。本論は、本誌第４号の内容をイェスイ妃に焦点を当てながら敷衍するものである。そしてこの考察において、平行して注目したいと思っているのが、黄河を“后の河（ハタン・ゴル）”と呼ぶようになった伝承として知られている、西夏からチンギスの娶ったグルベルジン・ゴア妃の伝承である。ただし、グルベルジン・ゴア妃（以下、グル妃）については秘史には一切の言及がない。しかし、伝承のグル妃の辿った運命は、重要な点でイェスイ（以下、イェ妃）と類似しており、このグル妃伝承は、秘史のイェ妃、およびチンギスの死後にイェ妃に西夏の民が与えられた顛末に深い意味を投げかけている。二人の后の重要な共通点は、両者ともにチンギスによって夫を殺されている点、そしてその後チンギスの妻になっている点に求められる。秘史において夫をチンギスに殺された后はイェ妃のみであることを考えると、この共通点は重要である。次節においては、まず、グル妃についての民間における伝承のなかでも最も注目すべきであると筆者が考える伝承を提示し、その解釈を試みることにしたい。

３．グルベルジン・ゴア妃の伝承

３－１．グルベルジン妃の伝承Ａの内容

グル妃の伝承のうちひとつを以下に紹介したい。これは西夏の故地である黄河湾曲部のオルドス地方のブルグド Bürgüd という人物が語ったものをハスローČ. Qasluu という人が編集したものであるという[7]。ただし、原本での見出しは黄河を“后（ハタン）の河（ゴル）”と呼ぶようになった伝承とある。後述のように、この伝承にはヴァリアントがいくつかあるので、ここで紹介する伝承をＡとしておく。ただし、長い文章は適宜切って訳してある。

Ａ：〔黄河は〕ボヤンハラ山を水源として、母なる大地を包んで南に湾曲してから再び北に流れ、さらに東の方角に流れ込んでダライ・テンギスに合流している。この黄河のもとの名前は「ハタン・ゴル（「后の河」）ではなく、〔以前は〕ハラ・ゴル（「黒い河」の意味）と言っていたという。後になって、なぜ「后の河」と呼ばれるようになったかについては、次のような伝承がある。聖主チンギス・ハーンは全モンゴルを統一し、勝利の勢いで南に侵攻し、金国を攻めて従えたということで意気揚々としていた。冬のある朝、狩りに出発して進んでいくときに、一匹の狐を射て傷を負わせた。その狐は雪の上に血を滴らせながら逃げていった。チンギス・ハーンは血の斑点をたどって狐のあとをつけていった。こうして真っ白な雪と真っ赤な血を見ているうちに、「雪のように白い顔をした、血のように赤い頬をした女がいれば、后として娶りたいものだ」と言ったという。傍にいたジャムハという大臣が聞いて、「主よ、貴方はそれに悩む必要はありません。西夏のシドルグ王にはグルベルジン・ゴアという名前の后がいます。彼女の顔はこの雪のように白く、その頬はこの雪の上に滴った血のように赤いといいます。シドルグ王は以前、貴方の命令に背きました。〔それゆえ〕次は〔貴方が〕西夏の民をほしいままにし、かのハーンの后を自分の后にしていいのです。」と言った。主チンギスはこの言葉を聞いて喜び、西夏の民を従えるために戦争をしかけた。この戦争に西夏の民は負けた。チンギス・ハーンは西夏のシドルグ王の宮殿に入って、まずはシドルグ王を謀反の罪で殺そうとした。シドルグ王はチンギスに言った。「大王よ、私を殺さないでください。グルベルジン・ゴア后を娶るなら娶りなさい。」と言ったという。しかしシドルグ王は以前にチン

ギス・ハーンの命令に背いたため、〔チンギスは〕許さず、刀を抜いて切りつけた。〔だが〕刀はシドルグ王を切りつけても切れなかったという。これをみてシドルグ王はチンギス・ハーンに「貴方が私を許さずに殺そうとしても、あなたの刀で私を切りつけることはできない。私の刀で切りつけてはじめて私を殺すことができます。」と言った。チンギス・ハーンがその刀を取って切りつけようとすると、シドルグ王はまた「私の言い残す言葉を2つ聞きなさい。」と言った。「女人は邪な心をもっている。貴方はグルベルジン・ゴアを后として娶るときに、よく気をつけなさい。もうひとつは、私を切るときに強く切りつけてはいけません。」と言った。チンギス・ハーンは心の中で「こいつの言葉で軽く切りつけてまたうまくいかなくなってしまったらどうするか。」と思って強く切りつけると、シドルグ王の首が切れただけでなく、刀が三つの部分に折れた。鋭い切っ先はロシアの地に跳んでいき、中央の部分はキタド（中国）の地に落ち、手にはただ握り手の部分のみが残った。そんなわけで、ロシアの鉄の切っ先は鋭くなり、キタドの鉄は中位によく、モンゴルの鉄は黒くて握り手と同様に粗悪なものになったという。チンギス・ハーンはシドルグ王を殺して、グルベルジン・ゴア后を后として娶った。グルベルジン・ゴア后は心の中に邪な考えを抱いていたので、小刀（髪を切る刀）の刃を砕いて爪の間に挟んで隠しておいた。夕刻、ハーンである主が枕を一つにして寝た後に、グルベルジン・ゴアはこっそりと爪の間に隠してあった刀の断片でハーンの睾丸を切り落として、致命傷を与えるや逃げ出してハラ・ムルンに飛び降りて亡くなった。それゆえ、“ハラ・ムルン（黒い河）”を“ハタン・ゴル（后の河）”と呼ぶようになったという。また“ハタン（后）・エケ（母）”ともいうようになった。

3－2．グルベルジン妃の伝承の“二重の意味構造”

前述のように、秘史のイェ妃と伝承におけるグル妃の共通性は、両者ともチンギスによって夫を殺されている点、そしてその後チンギスの妻になっている点に求められる。むろん、グル妃はチンギスに致命傷を負わせる下手人である点で、秘史のイェ妃とは大きな違いがある。この相異がなぜ生じたかについては後述したい。ここで指摘しておきたいことは次のことである。それは、前述のように、秘史ではグル妃については全く言及がないのであるが、この伝承におけるジャムカ大臣の発話のなかにある「シドルグ王は以前、貴方の命令に背きました」という言葉は、秘史における次のような内容と連関しており、伝承Aと秘史との関連が全くないとはいえないということである。

すなわち、秘史の巻11第249節においてチンギスは金国への出馬についで西夏遠征をおこなっているが、このとき西夏国王であるシドルグ王はチンギスに投降して「陛下の右手になってお力添えしましょう」と言っていたのであるが、実際にチンギスが秘史の巻11第256節においてサルトール族征伐のさいにチンギスがその約束の履行を迫るとシドルグ王の宰相であるアシャ・ガンブは反対をし、援軍を送らなかった。そこで、サルトール征伐のあとにチンギスは裏切り行為をなしたという理由で西夏を滅ぼすのである。伝承におけるジャムカ大臣の言葉はこのような秘史の一連の内容を指しているものと理解でき、この点で、秘史との関連でこの伝承を読むことができる。ただし、秘史には、この場面でジャムカは登場しない。また、秘史においてシドルグ王は「ブルカン」（「仏」の意）という名前で登場しており、チンギスが殺害する際に「正直な」を意味する「シドルグ」という名前を付けられて殺されているので、伝

承においては秘史で死の直前に付けられた呼び名で登場しているということになる。

伝承の内容の分析に入ろう。一見したところ、この伝承は西夏のグル妃の悲劇であり、チンギスは女性の色香に迷って油断して亡くなった話として読める。しかし、伝承はもう少し深いものを指し示しているように思われる。それを考える契機は、グル妃の夫であるシドルグ王が自らを殺す武器をチンギスに敢えて渡している行為の検討にあるように思われる。シドルグ王はチンギスにまずは命乞いをしているのであるから、自らを破滅させる武器を渡す行為は自殺行為であるといえよう。なぜこのようなことをしたのであろうか。この問いは、実際のところ、この伝承の解釈の岐路となっているように思われる。なぜならば、シドルグ王の行為を意味ないものと解すると何も生まれないが、意味あるものとすると、全く新しい情景が立ち現れてくるからである。

すなわち、シドルグ王は自ら武器を敵に渡すことによって「殺された」のではなく「殺させた」と言えるのではないかということである。つまり、彼は自ら武器を敵に渡すことにより、彼の死は「殺される」という受動的死ではなく、「自らを殺させる」という積極的な死に転化する。このような視点でグル妃の死を見ると、彼女もまた、自殺という形をとっているので一見悲劇的な死のように思われるが、彼女もまた「自分を殺した」ともいえよう。少なくとも彼女は何人によっても「殺されてはいない」。これもまた受動的な死ではなく、積極的な死といえる。彼女は、チンギスを殺し、また自分をも殺した、というわけである。夫妻とも積極的な死を遂げたのである。結果的にみれば、シドルグ王はグル妬の性格を見抜いていたとさえいえる。すなわち彼は妻グルにチンギスを「殺させた」と言えるかもしれない。ならば、シドルグ王は「チンギスに自分を殺させ」、また「妻にチンギスを殺させた」ということになる。

この観点から見ると、チンギスのみ「殺される人物」となっていることは注目すべきことである。チンギスはシドルグ王もグル妬も殺してはおらず、彼だけがグル妃に殺されたことになる。しかも、チンギスは一見グル妃に油断して急所を傷つけられたように読めるが、チンギスは前もってシドルグ王にグル妃には気をつけるようにと警告されていたことを考えると、油断で亡くなったわけではないというべきである。チンギスは、シドルグ王の警告を敢えて無視したために身の破滅を招いているといえる。つまり、チンギスが「殺された」のは、「偶然」ではなく「必然」であったということになる。

このように、シドルグ王の奇妙な行為は、シドルグ王の行為を意味あるものと見なすか見なさないかによって解釈が分かれることになる。これは実際のところ、チンギス側に立つか立たないかということに連動している。筆者はこれまで、こうした立場の違いによって言説が明示的意味と非明示的意味とが逆対応する“二重の意味構造”を備える構造として立ち現れてくるメカニズムをモンゴルの物語に多くに認めてきたが、まさにこの伝承も同じような“二重の意味構造”を備えた言説ということになる[8]。

“二重の意味構造”という観点からこの伝承を整理しなおすと次のようになる。まず、シドルグ王の行為を意味のない行為とみなす場合には、この伝承は、シドルグ王が愚かに死に、グル妃は自死を選び、またチンギスは油断して死を招く話となる。この場合、非明示的意味は生まれないので、“二重の意味構造”は存在しないことになる。逆に、シドルグ王の行為を意味あるものと見なすならば、この伝承は、明示的レベルにおいては前述の解釈と同様であるが、

非明示的レベルにおいては、シドルグ王は、実は武器をチンギスに渡すことによって自らを殺させてやり、また間接的に妻にチンギスを殺させる積極的死を敢行し、グル妃は、チンギスを殺して夫の仇討ちをなし、チンギスに殺されるよりも前に自らを殺す積極的死を選択したということになる。そして、唯一チンギスだけが、シドルグ王も殺せず、グル妃も殺せず、偶然ではなく必然的にグル妃に殺された、ということになる。後者の場合、この伝承は、明示的意味と非明示的意味がまったく逆に対応する“二重の意味構造”をなしていることになる。

３－３．伝承のグルベルジン姤と秘史のイェスイ妃の呼応性

２．のイェ妃の話と３－１．のグル妃の話とを対照させると、両者は運命的に非常に共通していることがわかる。前述したように、両者とも夫をチンギスに殺されており、殺されたばかりでなく、夫を殺された後にチンギスの妻になっているのである。さらに、指摘したいのは、后の問題に焦点を当てると見えなくなってしまいがちだが、この問題は后という個人に限定して考えられるべきことではなく、実際は集団の問題であることである。

伝承のグル妃の死は、シドルグ王の死がすでに予告していたとはいえ西夏王国滅亡を決定づけ、このことは西夏という集団の滅亡を示す事態なのである。これと同様に、秘史のイェ妃の叙述は彼女の属するタタルという集団の滅亡を意味しているのである。じっさい、馬車の「こしき」と引き比べて背丈がその高さに達しているタタル人は根絶やしにされたとある（秘史巻5第154節）。加えて指摘したいのは、グル妃とイェ妃はその運命が呼応しているばかりでなく、実際のところ二重写しになっているとさえいることである。なぜならば、秘史の第268節で西夏の民の多くがイェ妃に与えられたと記されているからである。つまり、西夏の民は解体されてオルドス地域のモンゴル族に吸収されたのである。

2人の后の呼応関係に基づいて秘史のイェ妃の叙述をもう一度再読してみると、イェ姤の前夫の死に関する解釈を次のように変えることも可能である。前述したことであるが、重要なので繰り返すと、巻5第156節に見える、イェ姤の夫がチンギスによって抹殺される顛末である。そこでは、チンギスがイェ妃とイェスゲンというタタル姉妹を娶った後日、宴会においてイェ妃がため息をついているのを見て怪しみ、そこの宴会にいた男性たちを部族（アイマク）ことに分かれて立つように命じる。このとき、ある男性がどこの部族にも属さずに孤立しているのをチンギスが問いただしたところ、この人物はイェ妃の前夫であったことが判明する。この人物の出身は秘史では不明であるが、自らがイェケ・チェレンの娘であるイェ妃の婿であるという身分を明かし、戦乱も鎮まったので一旦は逃げたが大勢の中では目立たないと思いチンギス陣営に紛れ込んだと話している。これに対して、チンギスは反乱を起こそうと思って戻ってきたに違いないとして、この人物を直ちに斬らせている。

一読したところでは、イェ妃のこの夫はみすみす敵陣のなかで正体が割れて死に至る自滅的人物のように映る。しかし、シドルグ王が自ら武器をチンギスに渡して死に至る死に様を「積極的死」と解釈できるのであれば、このイェ姤の夫もまた自らの考えで敵陣に紛れ込むという決定をなした結果なのであるから、これもまた「積極的死」と見ることもできなくもない[9]。

ところで、グル妃の伝承は、秘史には存在していないが、この伝承のヴァリアントは各種の年代記に頻繁に記されていることが観察される。これらモンゴル年代記が記されるのは17世

紀以降であり、『元朝秘史』がおおよそ 13 世紀～14 世紀前半世紀の文献であることを考えると、両者の編纂年代にはざっと 4 世紀の開きがある。グル妃の事跡は無論チンギスの死亡した 1227 年頃の 13 世紀に関わることであるが、この話が 4 世紀も後の年代記に登場しているのは非常に興味深いことである。次節では、代表的な年代記を取り上げて、その中に現われるグル妃伝承を紹介し、民間の伝承Ａとを比較考察してみたい。

４．モンゴル年代記にみえるグルベルジン妃の伝承

４－１．サガン・セチェンの『蒙古源流』におけるグルベルジン妃の伝承

17 世紀以降の年代記で古いものとして、著者不明『アルタン・トプチ』とサガン・セチェンの『蒙古源流』の 2 つを取り上げたい。ただし、年代記の古さから言うと逆であるが、ここでは『蒙古源流』がグル妃の伝承で知られる黄河湾曲部のオルドス地方で書かれたことを踏まえ、『蒙古源流』を先に検討することにする。サガン・セチェンの『蒙古源流』に含まれる当該箇所を検討する前に、当該年代記について触れておくと、『蒙古源流』の著者サガン・セチェンは、先に紹介した伝記と同じオルドス地方（現在は中国内蒙古自治区内にある）出身で 1604 年に生まれた人物とされている。文献学的立場から各種のモンゴル年代記研究を蓄積してきた森川哲雄によると、『蒙古源流』は早くからオルドス以外のモンゴルの王侯の間に広くいきわたっていたために、数多くの写本、版本が存在する[10]。また、現在のところ、当該年代記の編纂年としては 1662 年説が通説となっている[11]。『蒙古源流』は知られているだけでも三十種以上の写本が存在しているが[12]、その写本の系統を森川は 5 系統に分類し[13]、その 5 系統に属する写本の代表的なものをそれぞれ対校して刊行している[14]。

グル妃の伝承部分の箇所について筆者はこの 5 種の対校本で確認したところ、5 系統の写本に大きな異同はなかった[15]。それゆえ、5 種の一つであり、また写本として定評のある“ウルガ本”（森川のＵ本のラテン文字転写）に基づいて以下にＢとして訳出しておく[16]（ただし下線筆者）。ただし、長い文章は適宜切って訳してある。

Ｂ：シドルグ王が蛇に変身すると、主は翼あるものの王である鳳凰に変身し、〔シドルグ王が〕虎に変身すると、主は獣たちの王である獅子に変身し、〔シドルグ王が〕子供に変身すると、主は天子たちの王であるホルモスタ天神に変身した。シドルグ王は仕方なく捕えられた。そして、シドルグ王は「私を殺すなら、お前の身に害である。救えばお前の後裔に害である。」と言うと、主は「我が身に害があるのは大丈夫だ。我が後裔に幸あるように。」と言って、弓を射て、〔またさらに〕斬りつけたが、殺すことができないときに、シドルグ王は「貴方は私を私の武器ではないもので殺すことはできない。私の靴底には、三重に折りたたんだ“ミセリ”という名前の刀がある[17]。それで斬りつければ殺すことができる。」と言った。その刀を取り出すや、またもや〔シドルグ王は〕次のように言った。「これから貴方は私を殺そうとしている。私の身体から乳が出てくれば、お前に害がある。血が出てくれば、お前の後裔に害がある。また、我がグルベルジ・ゴー妃を自分に娶るなら、全身をよく調べてみなさい。」と言った。かくして、そのミセリという刀で〔シドルグ王の〕頸を切りつけて殺すと、頸から乳が出てきた。シドルグ王を殺して、グルベルジ・ゴー妃を娶り、“ミナク（チベット語で「西夏」の意）”というタングート（西夏）の民を支配下に入れた。また

アルタガン王の土地で、“ハラ・ムルン（「黒い河」の意。黄河を指す）”の境に夏を過ごそうと言った。そして、グルベルジ・ゴー妃の美しさを街中の人が噂しあっていると、グルベルジ・ゴー妃が次のように言った。「この容貌は以前はこれよりももっと美しかったのです。いまやこの顔は貴方の兵士の砂塵にまみれて醜くなりました。この顔を河で洗えば、もとのように輝く容貌になります。」と言ったところ、〔主は〕「それならば、自分のやり方で洗いなさい。」と言った。それで、グルベルジ・ゴーが「河のほとりに行って洗います。」と言って〔河のほとりに〕行った。自分の父の召使の飼っていた鳥が上空を旋回してやってきたのを捕まえた。「私は大勢のみなさんに〔見られるのが〕恥ずかしいのです。あなた方はここで待っていてください。私は一人で行って洗いましょう。」と言って去った。〔グルベルジンは〕「私はこのハラ・ムルン（黄河）に落ちて死にます。私の骨は下流で捜さないように。上流で捜してください。」と書き記すと、その鳥の首に結わえて、その鳥を放った。〔そのあと〕身体を洗って帰ってくると、本当に輝きが増していた。それから夜になって寝た後、主の黄金なる身体に害をなしたことで、主は発熱した。その後、グルベルジ・ゴー妃は起き上がって出て行って、ハラ・ムルン（黄河）に落ちて死んだ。それから後、黄河をハラ・ムルン（「黒い河」）ではなく、現在まで“ハタン・エケ（「母なる后」）”と呼ぶようになった。そして、キタド（中国）のイルガイ城の「オーuu」という姓を持つ王爺という父親が娘の遺言どおりやって来て[18]、遺体を探したが見つけることはできず、真珠の織り込まれた靴下を片方だけ見つけた。〔そして〕各人がそれぞれ一鋤の土をその上にかけたので、“テムル（鉄）・オルホ（小丘）”と言う小さな丘になった。

以上がこの年代記の当該箇所Bであるが、以下、先に検討した民間伝承のAと対比させながら考察することにしたい（以下、A、Bと記述）。まず、グル妃の行為は、さきのAと全く同じであるが、チンギスを死に至らしめたわけではないとされているため、ここではグル妃がチンギスを殺し、また自らをも殺した、というような先の解釈をとるわけにはいかない。一方、シドルグ王が自ら武器を渡している行為は、若干の表現の差こそあれAと同一である点は注意を引く。シドルグ王の行為が意味あるものとすれば、この行為は「自らを殺させる」積極死を選んでいる行為となる。とはいえ、Aにはないシドルグ王とチンギスとのやりとりがここに記されている点は重要であるように思われる。すなわち、シドルグ王がチンギスに、自分を殺すならチンギスに害があるが、殺さなければチンギスの子孫に害があるという発言に対して、チンギスが、自分に害があるのはかまわないが、子孫に害がないほうがよい、と答えていることである。つまり、チンギスは、自分の生命には未練がなく、子孫のためには死も辞さない態度がこの言葉に表明されていると言える。しかも、Bにおいては、チンギスはグル妃に害されたとはいえ、それが原因で亡くなったとは直接書かれていないので、かなりチンギスに配慮した叙述になっているといえよう。

以上をみると、グル妃のチンギスに危害を与える叙述やシドルグ王が自分の自らの武器をチンギスに渡す叙述にはアンチ・チンギス的な色彩が認められるものの、チンギスが自分の死に頓着しない態度を表明している内容が含まれていることで、Bにはチンギスへの配慮もうかがわれる趣向を含んでいることが判明する。Aの“二重の意味構造”の視点から見れば、Bの叙述スタンスは中途半端なものになっているといえる。

4－2．著者不明『アルタン・トプチ』におけるグルベルジン妃の伝承

次に、著者不明『アルタン・トプチ』という年代記における当該箇所に着目したい。この年代記には、ゴムボエフ本、北京版Ⅰ、北京版Ⅱ、張家口版、ゴビ・アルタイ本等幾つかの写本が存在しているが、森川哲雄によると、これら写本にはいつ編纂されたかについては記載がないため種々の説が出されているという[19]。森川は主に 3 つの説を取り上げており、①17 世紀初頭、②1620 年代から 1630 年頃まで、③1669 年以降の 3 つである[20]。森川自身は②の説を採っている。当該年代記の成立年代について筆者は現在議論する力はないので、ここでは森川が北京版Ⅰと名付ける、1925 年に北京の蒙文書社から刊行された文献に基づいて、当該伝承の部分をＣとして抜粋したい。ただし、長い文章は適宜切って訳してある。

Ｃ：シドルグ王が蛇に変身すると主は鳳凰に変身した。〔シドルグ王が〕虎に変身すると主は獅子に変身した。子供に変身すると、主は老人に変身した。シドルグ王が捕えられた後、主のほうにむかって言った。「私を殺すな。金星をとらえて敵のない状態にしてやろう。彗星をとらえて雪害がないようにしてやろう。私を殺すならお前の命が危ういぞ。もし殺さなければお前の子供が危ういぞ。」と言った。〔チンギスは〕それに取り合わなかった[21]。〔しかし〕弓を射て、〔また〕斬りつけたが切ることができなかった。シドルグ王が言った。「私の身体に斬りつけても射ても切ることができない。私の靴の底に三重に折りたたんだ縄（モンゴル天幕の縛り紐）がある。それで首を絞めて殺せ。」その縄を取り出して首を絞めて殺そうとすると、シドルグ王は言った。「私をどうしても絞め殺すのなら、お前の後裔も私と同じように縊殺されるように。私のグルベルジン・ゴア后を爪の先から隅々を調べるように。」聖主はグルベルジン・ゴア妃を娶った。その美貌を、主をはじめとして人々が賞賛する。グルベルジン・ゴア妃は言った。「私のこの容貌は貴方の兵士の砂塵で汚くなりました。以前はこれよりもっと美しくありました。河で洗えばもっと美しくなります。」この言葉を、聖主は信じて、「河で洗え」と遣わした。その后は河辺を歩いていた青い雲雀の尾に文字を書き、「私はこの河で死にます。私の遺体は下流で捜さないように。上流で捜すように。」と言って父親に遣わして、河に身を投げて死んだ。その父親は、娘の言葉どおり捜したところ、河の上流に来て〔遺体を〕発見した。一人ひとりが一袋ずつの砂をかけて遺体を埋葬した[22]。陵墓は“テムル・オロホ”と言う。

以上が著者不明『アルタン・トプチ』の内容である。『アルタン・トプチ』にはロブサンダンジンによる『アルタン・トプチ』もあるが、少なくともグル妃の部分を見る限り、著者不明のものとロブサンダンジンによるものとの間で内容的に異なるところはない[23]。

4－3．Ａ・Ｂ・Ｃの相互比較

以下、Ａ、Ｂ、Ｃの三者を対比させながら考察することにしたい。次節で詳しくみるが、当該伝承をモチーフごとに比較対照した表１を参照されたい。まず、三者の共通点を見てみたい。共通点は、大きなところでは、シドルグが命乞いをするにも関わらず、最終的には自らを殺す武器を与えている点である（表１の f）[24]。このモチーフの存在が確認できるということは、ＡやＢと同様に、シドルグ王の行為が意味あるものである場合、シドルグ王は自らを殺させて

積極的死を選択していることになる。

相違点を挙げると次のようになる。まず、グル妃の叙述についての異同であるが、その相違として注目すべき点はグル妃がチンギスに危害を与えるかどうかの有無である。AやBではあるものの、Cには見られない（表1のk）。すなわち、民間の伝承（A）か年代記の伝承（BやC）かに関係しない相異である。Cではチンギスに危害を与えず、自ら自殺を図っている。これは、かなり消極的死に方になっているといえる。夫に殉死したかのようである。しかし、夫であるシドルグ王がチンギスにグル妃の身体を隅々まで調べるようにという言葉があるので、グル妃がチンギスに危害を加える叙述部分がもともとは存在していた可能性は高い。Cではグル妃だけでなくシドルグ王もまた、後述するように、自分を殺せばチンギスの身に害があり、自分を殺さなければチンギスの後裔に害があると言っているところからみると、やはりグル妃のチンギスを害するという内容はもともと存在した可能性は高いのではないかと考える。

一方、シドルグ王の場合では、最初に命乞いをするのは3テキストで共通しているが、次の4点で異なっている。第一に、Cでは金星や彗星をとらえようと進言している点がAやBではない（表1のe）。第二の違いは民間の伝承と年代記との間の差異になっている。年代記には自分を殺せばチンギスの命に害があり、もし殺さなければ後裔の命に害があるというシドルグ王の言葉が存在している（表1のc）。ただし、この発話内容が意味あるものになるためには、グル妃のチンギスへの危害もしくはチンギスの死が必要である。にも関わらず、前述のようにこれらについてはこの一連の叙述には欠落している。第三の相違点は年代記間の相違で、前述のシドルグ王の発話に対するチンギスの返答の有無である（表1のd）。すなわち、Bでは自分の身に害があるのはよいが、子孫に害があるのは困るというチンギスの返答が存在するのに対して、Cでは欠落している。第四の相違点は民間の伝承か年代記の伝承かには関わらない相異で、チンギスが切ったシドルグ王の身体から血ではなく乳が流れ出すモチーフの有無である（表1のg）。このモチーフはBのみあり、AやCでは見られない。このモチーフの存在はシドルグ王に配慮したものになっているので、このモチーフがないことは、シドルグ王ではなくチンギスに配慮したものになっているということを意味しよう。

以上、三者の共通点と相違点をまとめたが、Cのテキストの特徴として、次のようにまとめることができる。すなわち、Cにはグル妃がチンギスに危害を与えるという叙述がない分、Bよりもはるかにチンギスに配慮した内容となっているといえることである。しかし、これは妥当ではないかもしれない。なぜなら、CにはBにおいてチンギスに配慮した、チンギスの自分の命はどうでもいいという発言が見られないからである。むろん、これはグル妃のチンギス危害がないので必要なかったとも言える。ということは、この二つのモチーフは連動しているのかもしれない。つまり、グル妃のチンギス危害があるBではチンギスの自分の命に言及した発言があり、グル妃のチンギス危害のないCではチンギスの発言がない、ということである。それならば、BとCの間にとくにチンギスに対するスタンスとして差異を認める必要はないことになる。

興味深いのは、こうしたチンギスへの配慮が見られるものの、3つの伝承すべてに共通しているのは、シドルグ王が「自らを殺させる」という積極的死を選択していることである。この点を重視すれば、これらの伝承にはアンチ・チンギス的な志向が認められる。しかも、前述の

ように、Cにはグル妃がチンギスに危害を加えた叙述が見られないものの、他の叙述との関係で元来存在した可能性を強くうかがわせているので、グル妃の伝承にはやはりアンチ・チンギス志向を認めてよいであろう。とはいえ、Cについても、Aのような“二重の意味構造”は認められず、チンギスへの配慮が見られるので、Bと同様の評価を下すことができる。すなわち、Aの“二重の意味構造”の視点から見れば、チンギスにも西夏にも配慮した、中途半端なスタンスで叙述が構成されているということである。

5．民間の伝承と年代記の伝承との関係

5．1．A以外の民間の伝承及びB・C以外の年代記について

民間のAには年代記BやCと異なる意匠が施されているとはいえ、民間の伝承が常にAの内容になっているわけではない。たとえば、チンギスに関わる伝承を集めたテクスバヤル Tegüsbayar 編纂の伝承の中にはグル妃伝承として10編のテキストを挙げているが[25]、そのうち3編は本論で紹介した3つのテキストと重複している。年代記としては『シャラ・トージ Šira tuγuji』の名前で知られる18世紀初頭に編纂された年代記における当該伝承箇所も取り上げられている[26]。また、本論で紹介したものと重なっていない民間の伝承が6編含まれている。そのうち、4編の典拠は播磨楢吉が昭和13年1月に善隣調査月報68号に紹介した日本語によるものである[27]。残り2編のうち1編は『オルドスの記録』という著書からの引用である[28]。最後の1編はロシアのプルジェワルスキーの『蒙古と青海』に記載の伝承となっている[29]。紙幅の都合で各々を紹介することができないので、各伝承の特徴をある程度知りうるように、重要な指標になると思われる要素を12点挙げて、各伝承におけるそれらの要素の有無を表1として整理した。表1においては、『シャラ・トージ』所収の当該伝承はSTと記載してある。また、その他は次のようになっている。すなわち、⑤は『オルドスの記録』所載のもの、⑦は『ボガティーン・オチ Buγutu-yin oči』という雑誌の1984年12号からの1編[30]、⑧は善隣協会の雑誌所収のオルドス伝承、⑨も同雑誌所収のハルハ伝承、⑩はプルジェワルスキーの伝承、⑪は善隣協会の雑誌に記載されている2つ目の短いオルドス伝承である。ここで、⑤はテクスバヤル編纂本の24－5、⑦は24－7に対応しており、その他も同様に対応している。最後の（12）は、Aが入っている文献に含まれているもう一つのヴァリアントである。ただしテクスバヤル編纂本には含まれていないので⑫ではなく、（12）としておく[31]。

5－2．年代記の特徴・民間の伝承の特徴・両者に共通する特徴

表1に基づいて、以下、年代記の特徴、民間の伝承の特徴、そして両者に共通する特徴を整理してみたい。

年代記は表1の太線で囲んである3つの年代記すなわちB、C、STである。この3つの年代記すべてに共通して現われて民間の伝承には現われないモチーフと単純に言えるのは2つある。1つは、チンギスとシドルグ王の変身闘争のbのモチーフ、もう1つはcのモチーフすなわちシドルグ王の発言「私を殺せばお前に害、殺さなければお前の子孫に害がある」というものである。ただし、cとdがシドルグとチンギスとの質問と応答という対を構成するモチーフとなっていること、民間の伝承にはこのdのモチーフがまったく現われていないこと、この2

つの理由で、Cの年代記にはdが現われないとはいえ、dのモチーフは年代記的特徴と考えてよいであろう。また、グル妃が鳥に遺書を結わえ付けるiのモチーフとグル妃が河で溺死した自分の遺体をどう捜すかについて言及するjのモチーフは、民間の伝承のうち（12）以外に現われないので、年代記の特徴であるという傾向性を指摘することができるであろう。

逆に、民間の伝承の特徴を検討しようとすれば、民間の伝承に存在し、かつ、年代記には共通して存在しないと言える要素を探すことになる。表1に基づくかぎり、この条件に完全に合致するものはないが、aというモチーフは、このモチーフを完全に欠落させている⑪と（12）を例外とするならば、それに該当しているといえよう。aはグル妃を娶る契機として、チンギスが狩で白い雪の上に滴れた獣の赤い鮮血をみて欲情するモチーフである。（12）は前述のようにjのモチーフを有するなど年代記の影響を指摘でき、実際、後述のように、年代の影響の下でつくられた可能性があるので、ここでは⑪のみを例外として取り扱うことにしたい。だが、⑪は12のモチーフのうちkのモチーフすなわちグル妃がチンギスに性的危害を加えるモチーフのみを有していることから、⑪は核心部分だけを残したヴァリアントである可能性が高く、⑪のaの欠落は他のヴァリアントにおけるモチーフの有無とは異なる意味合いをもつものとして考えるべきである。また、表中で△が付されている⑦や⑩は、aのモチーフそのものではないとはいえ、それに類似するモチーフであるので、○の数に入れている。

具体的にいうと、⑦の場合、そもそも主人公がチンギスではなく「チンギスのある将軍」であるものの、物語全体としてAの類話であることが明瞭である。ここでは将軍の近侍の兵士が毎日、将軍のために兎を狩って、その肉を焼いてやっていたとあり、ある日たまたま追っていたウサギをシドルグ王の宮殿近くで射止めたため、シドルグ王の宮殿で調理したところ、そこにグル妃がいたということになっている。兵士はこのグル妃の美貌に見とれているうちに兎をまる焦げにしてしまう。これはグル妃が物語の俎上にあがる発端を構成している。一方、⑩では、シドルグ王は登場せず、シドルグ王に対応する人物「モンゴルのギチン（キチン？）王」が登場する。物語全体をみるとやはりAの類話であることがわかる。ここでは、チンギスがこの王の妻である女性に横恋慕したことが事件の発端として描かれている。狩ではないが、女性の美貌が発端となる点で、ここでもaのモチーフを認めてよいであろう。

以上から、aのモチーフは、民間に存在しているのに対し年代記にはないと言える。つまり、民間の伝承ではグル妃の美貌が事件の発端になるというモチーフが現われているのに対して、年代記では西夏征伐の文脈のなかでグル妃が登場している。それゆえ、このaのモチーフは民間における特徴と位置づけることができそうである[32]。

最後に、民間と年代記に共通する伝承のモチーフはどのようなものがあるかをみよう。この場合、グル妃は民間・年代記の別を問わず、すべての伝承において自殺して亡くなっていることである。またこのことが黄河を“后の河”と呼ぶように理由としていることは共通している。ただし、そのために表1においては敢えてモチーフとして挙げていない。それ以外で比較的共通しているのは、表1において11例中8例にみられる、グル妃がチンギスに性的危害を加えたというモチーフkである。このほか、シドルグ王が相手に自らを抹殺する武器を渡すfのモチーフが10例中5例と半数あるが、これを民間と年代記に共通するといえるかどうかは現在のところ判断が難しい。

以上、グル妃の自殺と合わせて、女性であるグル妃がチンギスに性的危害を加えたというモチーフが民間及び年代記にかなり共通している点を確認できたことは重要である。なぜならば、本論で重要だとして提示した民間伝承Aは、まさに伝承全体に共通するグルの自殺をグル妃のチンギスへの性的危害と同様なる積極的行為として解釈の転換をうながすものであったからである。

民間伝承と年代記を対置させてみたが、興味深いことは、年代記においてはチンギスに対する叙述のスタンスが曖昧であるのに、民間ではおおむねアンチ・チンギスのスタンスを取っていることが観察されることである。だが注意を要するのは、民間伝承と年代記は実際のところ対立するわけではないことである。事実、民間伝承である（12）には年代記的特徴である、グル妃が鳥に遺書を託すモチーフと、グル妃が自分の遺体を上流で捜すようにという指示するモチーフが存在しており、このことを如実にうかがわせている。そもそも『蒙古源流』の作者サガン・セチェンは当時の民間伝承を利用しつつ叙述を再編成したのであろうと考えられる。だとすれば年月が経過するにつれ、年代記の写本が民間伝承に影響を与えたことは大いに想像されるところなのである[33]。したがって、以上に検討した民間伝承や年代記の特徴といったものは、あくまでも傾向として理解すべきだということになる。

6．結論－グルベルジン妃伝承の作者論から推測される秘史のアンチ・チンギス志向－

以上の考察を踏まえて、秘史の第268節に立ち戻ってみる。Bを含む著者不明『アルタン・トプチ』やロブサンダンザンの『アルタン・トプチ』の内容は、秘史の内容と約8割重複している。この事実を踏まえると、秘史において著者不明『アルタン・トプチ』に採録されているグル妃の伝承が欠落していることは注目されるべきことである。5．で述べたように、民間のAと比較すると、年代記のBやCにおけるグル妃の伝承はその叙述スタンスとして中途半端なものとなっている。このことを重視するならば、秘史においてグル妃に全く言及されていないのは、チンギスに配慮し、チンギスの名誉を守るためであるという結論が導かれそうである。

しかし、本論では、ここにも“二重の意味構造”を認めていいのではないかと考えている。つまり、明示的にはチンギスの名誉を守るためなのであるが、非明示的には全く逆のことを示しているのではないかということである。すなわち、非明示的レベルにおいてはアンチ・チンギス志向が読み取れるのではないかという仮説を提示したい。そして、このことをグル妃の伝承の考察の延長で提示したいと考えている。

その前に、なぜ秘史のこの箇所の解釈に、秘史で叙述の欠落したグル妃の伝承を用いるのかという点を解決しておく必要あろう。これは、グル妃の伝承を秘史の解釈に用いるのが果たして妥当なのかどうかという問題である。まさにこの問題に対して、筆者は妥当であると考えている。なぜならば、グル妃伝承の担い手を筆者はイェ妃、もしくはイェ妃の立場に立つ人間ではないかと考えるからである。この仮説の根拠について、以下、説明しよう。

本論で幾度か言及したように、イェ妃とグル妃には大きな共通性がある。それは、両者とも夫を殺された後に、チンギスの妻になる点である。そして、秘史第268節において、西夏の領民の多くがイェ妃に与えられたとあり、これをグル伝承と関連付けるならば、グル妃が引き継

ぐべきであった領民をイェ妃が引き継いでいることになるのである。このことを踏まえると、グル妃とイェ妃は密接に関わっており、ほぼ両者は二重写しになっているといっても過言ではない[34]。この意味で、イェ妃はグル妃の伝承によって癒されていた、と考えてみたい。なぜならば、イェ妃はこの物語を語ることで、「チンギスを殺させた」と言えるからである。しかも、前述のように、イェ妃の前夫が「自らをチンギスに殺させた」という解釈が可能とすれば、チンギスはこの物語を妻であるイェスイにさせることを、チンギスの意向はさておき、結果的に許していることになるので、チンギスは「自らを殺させている」ということになるのである。そして、イェ妃はグル妃の伝承を語ることにより、グル妃のAの伝承における非明示的意味である「チンギスのみが殺された」という不名誉を挽回することになるのである。

語り継ぐ語り手としてだけではなく、筆者はさらに、イェ妃はこの伝承の作者でもある可能性を考えている。なぜならば、イェ妃は秘史の叙述に基づけば、単に前夫を殺された人物ではなく、前夫を殺される経緯の発端を創ったのはイェ妃その人の「ため息」であったと描かれているからである。つまり、前夫の死には、チンギスだけでなく、イェ妃にも責任があったといえる。この事実がイェ妃に慙愧の念を植え付けたということは充分にありうる。グル妃と同様、チンギスがイェ妃を娶ったのは、まさに彼女の美貌、彼女が女性であったという理由以外にはないのである。それゆえ、イェ妃は「女性」という立場から、前夫の復讐を果たす必要があったと考えられる。イェ妃の運命が翻弄されたのは、女性という理由以外にはなかった。それゆえ、グル妃の伝承におけるチンギス危害がまさに男性器切断に収斂しているのだと筆者は考える。

この場合、イェ妃の復讐は、チンギスの妻になった後で行なわねばならなかったことに注意を向ける必要がある。つまり、イェ妃にとって、チンギスは敵でもあり、夫という味方でもあるのである。こうした複雑な関係のもとで、前夫の復讐をするためには、“物語”という力を借りる必要があったのではないかと考えられるのである。すなわち、イェ妃は“物語”によってチンギスを殺したというわけである。つまり、イェ妃は自分自身の運命の分身でもあるグル妃に自らの代理戦争をさせたということになる。そして同時に、イェ妃はグル妃に夫を殺させてもおり、またイェ妃が語ることによって、チンギスはこの物語によって「自らを殺させる」積極的死を遂げたという名誉挽回も果たすというからくりである。以上のように、論理的にも道義的にも、イェ妃の立場はこの伝説の作者に相応しい気がするのである。

以上に述べたグル妃の伝承の語り手論さらには作者論から引き出せる秘史の第268節におけるチンギスの死去についての詳細な叙述の欠落は、明示的にはチンギスの名誉を守るためであり、非明示的にはアンチ・チンギス志向を担保するためでもあったということになる。それゆえ、第268節の末尾が西夏の領民の多くがイェ妃に与えられたという叙述で締め括られるのは、まさに仕組まれたものなのであると結論できる。

表１：伝説と年代記におけるモチーフの有無の対照表
※○は当該モチーフが有るもの、△は当該モチーフに準じるモチーフがあるもの、×は当該モチーフが無いものを意味する。

伝説及び年代記のヴァリアント	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m
	狩の際の雪の白と獣の赤（グルベルジン妃伝説の発端となった場面）の有無	三つの変身逃走（チンギスとシドルグ王の戦い）の有無	シドルグ王の発言「私を殺せばお前に害、殺さなければお前の子孫に害」の有無	cの発言に対するチンギスの発言「自分は大丈夫である。私の子孫に幸あれ」の有無	シドルグ王の命乞いの交換条件発言の有無	シドルグ王が自らを殺す武器をチンギスに手渡す行為の有無	傷ついたシドルグ王の身体から出てくる液体（良き心をもっていれば乳、邪心をもっていれば血が出る）についての言及の有無	3つに折れて3つの国に飛ぶチンギスの武器についての言及の有無	グルベルジン妃が鳥書を託す行為の有無	グルベルジン妃が遺書を下流では上流で流すよう指示する発話の有無	グルベルジン妃がチンギスに危害を加える行為の有無	グルベルジン妃を埋葬した“テムル・オロホ”の地名の有無	備考
A	○	×	×	×	×	○刀	×	○	×	×	○砕いた刃で睾丸を切り取る	×	
B	×	○	○	○	×	○エジプト刀	○	×	○	○	○害をなしたとのみ叙述	○	
C	×	○	○	×	○	○天幕縛り紐	×	×	○	○	×	○	
ST	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○女性器に挟んで害をなす	○	
⑤	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○秘密の場所を刀で切り取る	×	35)
⑦	△	×	×	×	×	○弓矢	○	×	×	×	○刀で刺殺	×	36)
⑧	○	×	×	×	×	○刀	○乳でなく水	×	×	×	○男性器を鋏で切り取る	△	37)
⑨	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○刃物で男性器を切り取る	×	
⑩	△	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	38)
⑪	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○剃刀で男性器を切り取る	△	39)
(12)	×	×	×	×	×	×	×	×	○	△	×	×	

注釈

* 本稿の内容は2010年6月6日におこなわれた第34回日本口承文芸学会大会（於立正大学大崎校舎）で口頭発表したものである。

1) 栗林均・确精扎布編、『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引、東北アジア研究センター叢書第4号、東北アジア研究センター、2001年、871頁。

2) 巻狩とは、狩場を四方から取り巻き、獣を追い詰めて捕えることである。

3) 村上正二は『モンゴル秘史3　チンギス・カン物語』、東洋洋文庫、平凡社、東京、1997〔1976〕、271－274頁において、チンギス・カンの死因について解説し、秘史ではチンギスの死を落馬したことを原因としている（同書271－272頁）。この見解は秘史の第265節で描かれたチンギスの落馬に基づいている。筆者はおそらく秘史の「作者」はそのように読まれることを視野に入れていたと考えるが、第268節においてこの死因については明示されていないことが重要であると考えている。本論ではあくまでも「事実としての死因」ではなく、「死に関する叙述」を対象に論じている。

4) イェスイに領民が与えられたというのは、一種の財産分与と考えられる。Igor de Rachewiltz は The Secret History of the Mongols, Volume One, BRILL, LEIDEN・BOSTON,2004,pp.983－984 でこの意味を西夏の民がイェスイに“奴隷”として分け与えられたと解している。

5) 秘史においても史実においても、チンギスの死因は不明であるので、イェスイが第二の夫チンギスを殺害されたのか否か不明である。だが、チンギスの生前においては、チンギスに死があるとすればそれは戦死を含む「敵に殺害されること」によるものだと人々に想定されていたのではないかと筆者は考える。それゆえ、実際の死因とは関係なく、イェスイが第二の夫チンギスを殺害されることに言及できる論理というものに矛盾はない。

6) 「チンギス・カンをめぐる伝承の諸相－『チンギス・カンの伝承と歴史の地』という小冊子をもとに－」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第4号、2009年、52－54頁を参照。

7) Sonum・Alima, Qara mören-i “Qatun γoul”gejü nereyidügsen tuqai domuγ,　Ordus-un γajar-un ner-e-yin domuγ, Törülki nutuγ čubural bičig,Öbür mongγul-un soyul-un keblel-ün qoriy-a, 1994,pp.18-21.

8) “二重の意味構造”については、藤井麻湖（＝藤井真湖）、『伝承の喪失と構造分析の行方－モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』、日本エディタースクール出版部、東京、2001年及び同著者、『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』、風響社、東京、2003年を参照。

9) これと関連して再度確認しておくべきことは、伝承Aにおけるチンギスの死に方に対する評価である。先に、シドルグ王の行為を意味あるものとみなすならば、チンギスのみが他者に殺される人物となると指摘したが、チンギスもまたシドルグ王の言葉をあえて聞かないことで「自らを殺させた」と言えないのか、つまり「積極的死」と解釈する余地はなかったのかという点であるが、やはりチンギスの死はシドルグの話を本気にしなかった結果であり、「殺させた」とは言えないと考える。

10) 森川哲雄、『モンゴル年代記』、白帝社アジア史選書、白帝社　東京、2007年、198頁。

11) ただし、森川哲雄の当該解説を読むと、この年代に関する議論は終止符を打たれたわけではないことがわかる。森川前掲書、206－213頁及び同著者、『「蒙古源流」五種』、中国書店、福岡、7－12頁。

12) 森川前掲書、2008年、4頁。

13) この写本系統の詳細な検討は「『蒙古源流』の写本とその系統について」『アジア・アフリカ言語文化研究』50号、1995年、1－41頁。

14) 森川前掲書、2008年。

15) 森川の5種の系統のうち系統が特定できない写本系統に含まれる第五の系統に、最近出版された楊海英のオルドスに伝えられている2種の写本が含まれている（楊　2007）。筆者は、グルベルジン妃伝承の部分を確認したが、文献学的には相異があるとしても、内容的にはウルガ本と差異がない(61－62頁及び139頁)。

16) 森川前掲書、2008年、294－300頁。

17) ここで登場するmiseriは森川前掲書の五種対校本においては版本すべてにおいて同一のmiseriとなっているが、この語の解釈はいくつかある。烏蘭『≪蒙古源流≫研究』（遼寧民族出版社 2000年）243頁によると、チベット語のmiser「エジプト」他、mi gsal 「隠れた」、mi gsal-ba「入手できない」、イラク北部の地名 Mawṣil 等がある。

18) この「イルガイ城」を、岡田英弘の『蒙古源流』の邦訳に付された注釈では、秘史の Eri qaya で、寧夏（現在の寧夏回族自治区の銀川）としている。岡田英弘訳注、『蒙古源流』、刀水書房、2004年、133頁。

19) 森川前掲書、2007年、150頁。

20) 森川前掲書、2007年、150－153頁。

21) 「それに取り合わなかった」は原文では「その言葉のようにはしなかった」とある。

22) Činggis-qaγan-u čadig,Begejing Mongγul bičig-ün qoriy-a（蒙文書社）北京、1925年、41－43頁。

23) たとえばČoyiji, Altan Tobči,Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriγ-a,1999,pp.521－521を参照。
24) ただし、AやBでは刀であるが、Cではモンゴル天幕の縛り紐となっている。
25) Tegüsbayar, Činggis qaγan-u domuγ-uud, Mongγul soγul-un čubural bičig,Öbür Mongγul-un arad-un keblel-ün qoriγ-a,1998,pp.61-71.テグスバヤルはグルベルジ妃伝承に24の通し番号を付して、24－1から24－11までのヴァリアントを11種提示しているが、このうちの24－2と24－4は同じ年代記の中の別の場所に現われる箇所を示している。本論では、この2つを1つの伝承と数えることにしたので、10種となっている。
26) この『シャラ・トージ』からの抜粋は通し番号で24－1、『蒙古源流』からの抜粋は24－2及び24－4、著者不明『アルタン・トプチ』からの抜粋は24－3である。ただし『シャラ・トージ』を除くBとCの末尾に幾つかの写本の典拠が記載されており混合テキストとなっているので、本論では用いなかった。
27) 播磨楢吉、「伝承に現はれた成吉思汗」『善隣協会調査月報』68号、1938年、84－91頁。
28) この文献に関する典拠はビブリオグラフィーに見当たらないが、Tegüsbayar氏に後日確認すると、Gegen toli－Ordus-un tuqai temdeglel,Ündüsüten-ü keblel-ün qoriγ-a,1995,pp.130-132であることが判明し、氏の厚意により資料自体の提供も受けることができた。さらに、この原典は、著名なモンゴル学者であるモスタールト氏の1934年に仏語で北京で出版したものであることが判明した。
29) 原文はロシア語であるが、本論では日本語訳を参考にした。
30) Dalanγurbaという人物が掲載したもので、同雑誌pp.33－34。同雑誌は漢語名で『包头星火』で包头市で刊行された内部刊行物である。筆者はこの資料をTegüsbayar氏の厚意で入手した。
31) Sonum・Alima前掲書,pp.21－22.
32) ただし、年代記においてはチンギスよりもはるかに後代のエルベク王についての叙述で、このモチーフが現われているので、このモチーフそのものを民間に由来するものであるとは断定できない。
33) オルドス出身の研究者楊海英によれば、オルドスでは本論で紹介したBの『蒙古源流』が民間で広く流布しており、老人たちが文革期においても年代記の物語をあたかも自分自身が見たような、経験してきたような口調で語っていたと書いている。楊はこれを『蒙古源流』の写本2種を紹介した序の部分で述べており、ここからは民間伝承と年代記の相互交渉の痕跡がうかがえる。楊海英編・Narasun序文・Tobčin企画、『蒙古源流－内モンゴル自治区オルドス市档案館所蔵の二種類の写本』モンゴル学研究基礎資料2、風響社、2007年、1－2頁。それゆえ、今後、年代記と同様なる内容をもつ民間伝承が現われても不思議ではない。ちなみに、この2種の写本の内容を森川の五種本と対校してみたところ、若干の語句の差異はあるものの、内容的には同一のものとして扱えることが確認された。
34) Tegüsbayarは前掲書70頁において、西夏にはグルベルジンという名の妃は存在しなかったようであり、このグルベルジンはナイマン族出身のチンギスの妻グルベスと混同されたのであろうとコメントしている。
35) 他のヴァリアントにはないが、ここには、オルドスの6つの旗（ホショー）がチンギスの死後6人の息子に分け与えられて形成されたというモチーフが存在している。
36) この話においては、いわゆる主人公がチンギスではなく、チンギスの将軍であるとしている。ただし、本文でも述べるように、他の話とヴァリアント関係にあることは明白である。
37) 他のヴァリアントと異なるのは、この話では、シドルガ王妃がチンギスの陰茎を切り落として逃げて、河に投身自殺を遂げたあと、遺体は見つからないままであったが、川岸に残っていた衣服がオルドスのジュンガル旗の小帝王墓陵に保存され、毎年6月21日に祭典を行なうようになった儀礼の由来が記されていることである。
38) この話で特筆すべきことは、他のヴァリアントで西夏のシドルグ王に対応する王が、モンゴルのギチン（キチン？）王となっていることである。つまり、チンギスの敵がここでは異民族ではなくなっている。
39) この話で特筆すべきことは、他のヴァリアントで西夏のシドルグ王に対応する人物が、名前は不明のチベット王になっている点である。だがそれ以上にこの話の特徴は、本論でも触れるように、簡略化されすぎている点に求められる。